

海外移住 資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移住者の歴史と、その子孫である日系人について広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel: 045-663-3257(代) URL: <https://www.jica.go.jp/jomm>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 熊谷 晃子

熊本は我らのルーツ! -7万人の海外移住者とその子孫



南米に行ってきたモン。

©2010 熊本県くまモン

ペルーの熊本県人会を訪れたくまモン (熊本県提供)

企画展示

くまモンと学ぼう! 熊本移民の歴史と活躍

—こぎゃんすごか、わさもんと肥後もっこす—

2020年3月7日(土)～6月7日(日)

JICA横浜 海外移住資料館 (企画展示室)

公開講座

日系人アイデンティティとの再会

—尺八を通して叶えた、熊本におけるルーツ探し—

4月12日(日) 14:00～15:30

講師：洲上ラファエル広志 氏

(尺八奏者/東京音楽大学大学院博士課程/日本財団留学生)

会場：JICA横浜 会議室1

入場無料・予約不要

世界へ渡った熊本県人

熊本県は日本有数の移民送出県で、戦前・戦後あわせて7万人を超える県人が海外へ渡りました。特にブラジルに移住した人数は全国で最も多く、約2万4千人に及びます。世界へ広がった熊本県人の中には、移住先でリーダーとなる人材も現れました。

熊本県から海外への移民数
72,699人

戦前68,245人、戦後4,454人の合計
(出典：国際協力事業団1993年「海外移住統計」)



関東大震災後新装された熊本屋旅館 1926年 (提供：藤居一郎)

日本

横浜港の近くには移民たちが出航するまで過ごす移民宿(乗船周旋取扱業も兼務)があり、「熊本屋旅館」には熊本県出身者などが宿泊した

ブラジル

熊本県からブラジルへ渡った移民総数は23,575人で、全国1位。上塚周平(ブラジル移民の父)や間部マナブ(世界的に著名な画家)などが有名

ハワイ

熊本県からの移民は1885年の第二回官約移民に始まり、その後も熊本移民合資会社をはじめとした移民会社によって、たくさんの県人がハワイへ渡った

ペルー

日系人初の大統領に就任したアルベルト・フジモリ氏の両親は熊本県出身

ニューカレドニア

1892年、ニューカレドニアへ渡った第一回移民600人全員が熊本県出身の男性だった



©2010 熊本県くまモン

ハワイや北米、中南米、そしてヨーロッパやアジアの計15カ国に51の在外熊本県人会があるよ。
熊本地震(2016年)のときには、被災地を励ます寄せ書きや、総額5,000万円以上の義援金が届けられたんだ！だからボク、2018年にブラジルとペルーを初訪問して、県人会の皆さんと一緒に歌ったり踊ったりしてきたよ。
熊本県と在外県人会とのつながりは、今もずっと続いているんだモン！



ブラジル熊本県文化交流協会創立60周年記念式典に参加したくまモン(熊本県提供)

◆ ブラジル移民の父「上塚周平」 ◆

移民県・熊本の歴史を語る上で欠かせない人物といえば、熊本県下益城郡赤見村(現・熊本市南区城南町赤見)出身の上塚周平です。旧制第五高等学校(現・熊本大学)で夏目漱石から英語を習い、東京帝国大学法科を卒業した上塚は1908年、ブラジルへの第一回移民781人の輸送監督として「笠戸丸」に乗船し、ブラジルへ渡りました。

コーヒー農園の契約労働者として働く移民たちの厳しい生活状況を改善しようと、身を粉にして働き、日本人移民を雇い入れる土地を確保し開拓するなど、移民たちのために生涯を捧げたことから「ブラジル移民の父」と呼ばれています。



「上塚周平かるた」文章も絵も子どもたちによる手作り

熊本市城南町では上塚周平の功績を広く知らせようと2団体が活動をしています。

上塚周平顕彰「イッペイの会」の米原尋子会長は、「上塚は国内にいればエリートとして活躍できた人。ブラジルでは貧しい生活を送りながらも人々のために生きた。その姿を伝えたい」と図書館への資料の寄贈や講演会に力を入れています。

くまもと上塚周平顕彰会は子どもに分かりやすく伝えることを目標に、2013年に紙芝居制作を、2018年には上塚の母校にあたる熊本市立杉上小学の6年生の卒業制作として「上塚周平かるた」の制作を手伝いました。柴田真一会長は、「生涯をブラジル移民のために捧げた上塚の生き方は、もうすぐ中学に上がる少し不安な気持ちの子どもたちに勇気を与えるようだ」とその意義を語りました。

90年の時を超えてふるさと 熊本につながった浏上さん



ブラジル社会で育ち、自分のアイデンティティについて意識することもなかった日系ブラジル三世のフルート奏者が、あるとき尺八と出会い、その音色と奥深さに魅了される。

日本の伝統音楽に心を寄せ、尺八を極めようと奨学金を得て日本に留学。

大学院での研究と尺八の修行を続ける中で、

もうひとつ気になっていたこと、それは自分自身のルーツだった。

移民である一世の曾祖父が帰りたくても帰れなかった日本、そしてふるさと熊本。

古い手紙を見つけた彼は、自身のルーツを探す旅に出た。

吹いてください」と言われました。「シャクハチって何?」、これが私の尺八との出会い、日本との出会いです。

—その後、すっかり尺八に魅了されたそうですね

はい。大学で尺八の歴史や製作などを研究するうちに、我慢できず購入し、習い始めました。尺八はシンプルな竹笛ですがフルートよりも音出しや音階、音程が難しく、例えば風の音を出すためには、呼吸法や横隔膜、喉を使った細かいテクニックが必要です。全身を使って吹くため、まるで歌を歌っているような感覚になります。

西洋楽器ではド・レ・ミのドだけを聴いても意味はありませんが、尺八は一つの音だけでも心の奥深い部分を表現できるので、その表現方法に大きな可能性を秘めています。日本の伝統音楽の音色やリズム感などを通して、日本人の精神性や我々日系人のご先祖様につながるような気がしています。

また、尺八がきっかけで日本にも興味を持つようになり、26歳で初めて日本語を習いました。自分の中に眠っていたアイデンティティが再び呼び覚まされたのだと思います。

—日本に来たのはいつですか

2012年に京都で行われた「ワールド尺八フェスティバル」に参加し初来日、2015年から日本財団の奨学金を得て、東京音楽大学大学院の博士課程で勉強しています。

知られざる浏上家の歴史

—ルーツ探しの旅はどのように始まったのですか

2012年に祖父が亡くなった後、祖父の遺品が大きなゴミ箱に捨てられていました。「もしかしたら面白いものがあるかもしれない」と思い、ゴミ箱をひっくり返すと1通の手紙を発見。封筒の消印は1976年4月17日、宛名は曾祖父、差出人は熊本県

日系人への目覚め 尺八がつなぐ日本への道

—浏上さんはブラジル生まれの日系三世ですが、ご自身の民族的背景を教えてください

1929(昭和4)年、曾祖父母、祖父、祖父の弟、曾祖父の弟の5人がブラジルに渡りました。お金を稼いだら日本に帰るつもりでしたが、戦争に阻まれ、結局帰ることはできませんでした。祖父は同じく日本からブラジルに渡った祖母と結婚、父が生まれました。一方、母はイタリア系ブラジル人です。

—小さい頃、日本語を聞く機会はありましたか

祖父母は日本語で話し、父はポルトガル語で答えていました。祖母の作る寿司や煮しめ、饅頭などは記憶にあります。私が11歳のとき祖母が亡くなると、その後は日本語を聞くチャンスも、日本食を食べることもなくなりました。

—思春期のアイデンティティについて教えてください

兄の影響でフルートを吹きはじめ、ボサノバなどブラジル音楽に触れて、自分はブラジル人であることを強く意識していました。私の周りに日系人はいなくて、特に交流もなかったので、26歳まで自分と日本の関係を考えることはなかったですね。

—どんなきっかけで日本とつながったのですか

ブラジル日本移民100周年だった2008年、各地で日本文化イベントが開催されました。私はオーケストラのメンバーとしてフルートを吹くことになり、リハーサルで指揮者から「滝廉太郎の『花』という曲では、フルーティストは尺八の音色を想像しながら



フチガミ ヒロシ
淵上ラファエル広志

ブラジル生まれの日系三世。13歳からフルートをはじめ、カンピーナス州立大学の音楽学部で尺八と出合う。それをきっかけに日本文化にも興味を持ち、現在は東京音楽大学大学院博士後期課程で尺八の研究をしながら、古典本曲および琴古流尺八も修得中。日本音楽集団に所属し、和洋さまざまな楽器と共演し幅広く活動している。4月12日(日)の当館の公開講座で講師として登壇する。



宇城市の淵上茂樹さんでした。差出人がどんな関係の人なのか分かりませんでしたが、「淵上」「熊本」から親戚かもしれないと思ったのです。

—どうやって淵上家とつながったのですか

私はその手紙を持って日本に留学し、インターネット検索によって淵上茂樹さんの電話番号を見つけました。怪しまれないように日本人の友だちをお願いして電話を掛けてもらおうと、「はい、フチウエです」という女性の声が返ってきました。ブラジルに渡った曾祖父の名前を出すと、「はい、こちらですよ」と。その女性は差出人茂樹さんの妻トチ子さんでした。

最初に分かったことは名字が「フチガミ」ではなく「フチウエ」だったこと。それから、長男だった曾祖父が日本に戻れないため、淵上家は養子もらい、それが茂樹さんであったことです。

—会うことはできたのですか

フチウエ家とはそれ以来、手紙や電話で連絡を取っていましたが、一度「いつかお会いできたらうれしいです」と書いた手紙に返事がなく、「私に会いたくないのかな」と悩みました。でも、どうしても曾祖父の生まれた家を見たいと思い、フチウエ家の近くにある小学校に連絡をして、「ボランティアで子どもたちに尺八の演奏を聴かせたい」と伝えました。そして演奏日が決まり、フチウエ家に連絡をして「よろしければ見に来てくださいますか」と伝え、「ぜひうちに泊まってください」と言ってくれたのです。とてもワクワクしました。

—実際に会ってどうでしたか

2018年11月、熊本県宇城市に行きました。フチウエ家の前で、何と挨拶しようかなと考えていたところ、トチさんが「ご無沙汰しております」と言ってくれたのです。「ああ、これは帰りたくても帰れなかった曾祖父らに向かって、フチウエ家として挨拶をしているのだな」と感じて大変感動しました。

最初は緊張しましたが、仏壇にお参りをして(茂樹さんは他界)、フチウエの家族がずっとこの家を守ってくださっていることに感謝しました。茂樹さんは曾祖父がブラジルに渡った後に養子になったので、2人が会うことはありませんでしたが、私たち子孫はこうして会うことができました。来春ブラジルから両親が来るので、熊本に連れていくつもりです。

—ご自分のルーツを探る旅をして、どんなことを感じましたか

これまで、自分は尺八を通して日本とつながっていました。でも今は、日本に親戚が



熊本県宇城市のフチウエ家にて
(中央左ラファエル広志さん、その右がトチ子さん)

いて、自分のルーツも日本につながっているという安心感があります。これまでは自分中心で、楽しければいいと思っていたのですが、家族のつながりを知ると自分も次の世代をつくらなければ、という気持ちになりました。今回ルーツを探ったことで、移民の歴史や苦しみを理解できるようになり、ご先祖さまや家というものを大切にしていこうと思うようになりました。

*このインタビューは2019年12月に行ったものです。

淵上ラファエル広志さんの これまでの出来事年表

- 1929年(昭和4年)
曾祖父(29歳)、曾祖母(32歳)、祖父(5歳)、祖父の弟(1歳)、曾祖父の弟(19歳)の5人で神戸港から「博多丸」に乗り、ブラジルに渡る
- 1929年(昭和4年)
1929年に神戸港からブラジルに
出発した淵上家の家族パスポート
- 太平洋戦争
- 1985年(昭和60年)
淵上ラファエル広志 誕生
- 1989年(平成元年)
曾祖父 他界 日本語を耳にする
環境だった
- 1996年(平成8年)
祖母 他界(広志11歳)
- 2008年(平成20年)
尺八と出合う 日本との
つながりを再発見
- 2010年(平成22年)
尺八を購入し吹きはじめる
- 2012年(平成24年)
日本語を習いはじめる 家族に
移民一世がいなくなる
- 初めて日本へ
祖父 他界
- 日本からの古い手紙を見つける
- 2013年(平成25年)
半年間日本で尺八を習う
- 2015年(平成27年)
奨学金を得て日本へ
日本語学校に通う
- 2016年(平成28年)
東京音楽大学大学院に留学
- 2018年(平成30年)
熊本を訪れ、初めて淵上家を訪問 自身のルーツと
出合う
- 2020年(令和2年)
大学院博士後期課程修了



1929年に神戸港からブラジルに
出発した淵上家の家族パスポート



祖父の遺品から出てきた日本からの古い手紙

即位礼招へい日系人グループの訪問

2019年10月24日、天皇陛下即位礼招へい海外日系人の一行が当館を訪問しました。フィリピン、パラオ、アメリカ、カナダ、コロンビア、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、ペルー、それぞれの日系社会を代表する17名は、



太平洋に面するリマちゃん像と握手

ゆっくりと館内を見学しながら、自身や家族の歴史を振り返っていました。

アルゼンチン出身の金城 エルナン ラファエルさんは、「移住者

が横浜港から出発する前に、出身県別の移住先に滞在していたことなど、初めて知ることが多く、大変興味深かった」と述べました。



当館にて展示の説明を受ける

当館見学後は、第二次世界大戦後にアメリカ大陸諸国から日系人の協力もあって日本へ送られた救援物資・ララ物資の記念碑や、日本人のペルー移住100周年を記念したりマちゃん像など、近隣の移住関連スポットを巡りました。

第一回ハワイ官約移民・大槻幸之助氏の資料寄贈式

当館では、第一回ハワイ官約移民であった大槻幸之助氏の資料(約700点)を15年にわたり同氏ご子孫から寄託を受けてきました。1885年のハワイ渡航期の状況がわかる貴重な資料であり、当館内での活用のほか、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)で2019年10月~12月にかけて開催された企画展示「ハワイ:日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」など、外部からの貸し出し依頼にも協力してきました。

このたび大槻家ご子孫のご厚意により、これらを当館に寄贈していただくことになり、2019年11月6日に幸之助氏

の孫にあたる大槻 統さんと瀧澤 幸さんら4名の方にお越しいただき、資料の寄贈ならびに感謝状の贈呈を行いました。



感謝状を手にする大槻統さん(前列中央右)と、妹の瀧澤幸さん(前列中央左)を囲んで

和歌山県人会世界大会

和歌山県で初となる「県人会世界大会」が2019年11月24日、県民文化会館で開催され、国内各地の和歌山県人会をはじめ、過去に和歌山から海外へ移住した人たちの子孫などでつくる海外県人会などからおよそ2,000人が出席しました。



主催者挨拶をする和歌山県の仁坂吉伸知事(©和歌山県)

和歌山県は移民を送り出した数が全国で6番目に多い移民県。これまで北米や中南米、オーストラリアなどに約3万3,000人が移住しています。この世界大会には8カ国11団体、約280人の海外移住者・日系人が参加しました。

記念式典では、県人会を代表してブラジル県人会の谷口ジョゼー真一郎会長が、「初代の移民から100年余りがたち、戦前移民はすべて他界しました。いまは日系二世、三世が県会の運営に関わっています。今後も和歌山県とのつながりを末永く守っていききたい」と挨拶しました。

式典に先立ち、近くのホテルでは「紀州てまり」づくりや、平安衣装の着付けなどの体験ブースが並び、海外県人会の参加者らが故郷の伝統文化を体験しました。また、翌日からは紀北、紀中、紀南の3コースに分かれての「ふるさと巡りツアー」が催され、海外県人会のメンバーらは名所旧跡を訪問したほか、



次世代を担う高校生らとの交流を通して、移民の歴史と世界を知ることの大切さを伝えました。

「紀州てまり」づくりに挑戦する海外県人会の参加者(©和歌山県)

海外移住資料館 来館60万人目は、公文国際学園 中等部(横浜市)の皆さん



JICA横浜 海外移住資料館は2019年12月6日、来館60万人目となる横浜市戸塚区の公文国際学園中等部1年生の生徒たちを迎え、記念式典を行いました。

式典では熊谷晃子館長と中等部の生徒たちが入口に用意されたくす玉のひもを引き、うまく割れると会場は一気にお祝いムードに。その後、館長より感謝状と記念品を贈呈しました。代表してあいさつに立った男子生徒は、「60万人目と聞いてびっくりし、緊張しましたが、この機会にJICAのことをもっと知りたいと思います」と笑顔を見せました。

海外移住資料館は、日本人の海外移住の歴史と日系人の貢献についての理解を広めることを目的として、2002年10月、多くの移民が旅立った横浜の地に開設されました。戦前戦後の日本の移住史や日本人移住者の暮らしを伝える「常設展示」と、定期的

に更新される「企画展示」で構成されています。館内ではボランティアガイドによる丁寧な解説が受けられるほか、学生や自治体職員、教育関係者などさまざまな方のニーズに合わせた学習プログラムもご用意しています。

全国から多くの方々にお越しいただき、「JICAプラザよこはま」の国際協力に関する展示や、開発途上国で活動していた元海外協力隊員の体験談などの「JICA横浜訪問プログラム」も併せてご利用いただいています。

今後も皆さまに愛され、ご来館いただけるよう、関係者一同尽力して参ります。どうぞよろしくお願いいたします。



海外移住資料館 周辺マップ



今後の予定

4月12日(日) 公開講座「日系人アイデンティティとの再会
— 一尺八を通して叶えた、
熊本におけるルーツ探し —」

7月上旬～ 企画展示「スポーツがつないだ！
日系人と日本の知られざる歴史」(仮)
(11月上旬まで)

- 開館時間 10:00～18:00 (入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)と年末年始
臨時休館 4月19日(日)
- 入館料 無料

- アクセス
- みなとみらい線: 「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分
 - JR線・市営地下鉄: 「桜木町」駅から(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)徒歩約15分
 - 市営バス: 「ハンマーヘッド」他から徒歩約2分